

# 衣食住遊

第九回

## 大河ドラマ『真田丸』と時代考証

文丸島和洋

Marushima Kazuhito

まるしまかずひろ／国文学研究資料館研究部特任助教。2000年慶應義塾大学文学部史学科卒業。05年同大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学。08年「戦国期武田氏権力の研究―取次論の視座から」で博士・史学。専門は戦国大名論。著書に『真田四代と信繁』（平凡社新書）、共編著に『武田氏家臣団人名辞典』（東京堂出版）など多数ある。

私は、2016年大河ドラマ『真田丸』（三谷幸喜脚本）の時代考証を担当している。今回は、全編にわたり三人のチームで考証を行うという体制をとっている。私はまだ40にもなっていないから、考証者としてはかなり若い部類に入るだろう。残りの二人（平山優・黒田基樹両氏）は、私の約一回り上だが、普段から親しくさせていただいている関係である。

時代考証とはどういう仕事か。脚本家が書いた台本に対して、事実関係の誤りを正したり、言葉や人びとの考え方を当時のものに近づけていくことが基本である。もつとも、江戸時代の講談などで作られたエピソードであれば、有名なものは許容する。

第一稿の台本では、登場人物の台詞が現代語に近い。これを当時の会話らしく直していく。近現代の言葉を排除して、できる限り戦国時代の言葉に置き換える。とはいっても、視聴者が聞いて分からなければ台無しだから、あまり難しい言葉は使えない。やむを得ず、現代語のままにすることもある。これはNHKのスタッフに専門家がいたのでお任せすることが多いが、こちらでも手を加える。たとえば「眼鏡に合う」は却下。眼鏡は伝来していたが、大名クラスしか手にできない貴重品なので、慣用句になっているはずがない。

会話も身分差を踏まえて、敬語をどう使うか考える。尊称でいうと、信長なら「上様」、守護職を持つ戦国大名である武田勝頼や上杉景勝なら「御屋形様」、そうでない徳川家康や真田昌幸は「殿」とする。登場人物の座る場所も、身分を考えて指示をする。番組中で使われる書状や地図などの小道具の準備も手行う。

しかしあくまでドラマだから、史実通りには話が進まない。省略もあるし、



真田信繁像

所蔵／原昌彦氏 画像提供／真田宝物館

は、この部分である。もつとも、あまりに現代人の感覚からかけ離れてしまうと視聴者がついていけなくなるから、スタッフと繰り返し議論する。

ドラマ序盤のキーワードとして「国衆」とよばれる、戦国大名に従属する自治領主が出てくる。真田家も国衆の一つで、戦国大名とは違う目線から戦国時代を見てもらおうという意図がある。また、村同士の争いの場面もあるが、戦国時代の百姓は、刀と脇指を帯びて武装している。だから農具ではなく、槍などの武器で戦わせるようお願いする。

さらにいうと、主人公である真田信繁（幸村）は、豊臣秀吉に気に入られていくのだが、だからといって、寧（北政所）や茶々（淀殿）といった秀吉の妻の生活空間である「奥」に成人男性を入らせてはならない――。こうしたことを指摘していくのである。

ようするに、三谷さんが語りたテーマを、戦国時代の話として違和感がないようにサポートするのが仕事なのだ。今回の時代考証は、NHK側との連携が、チームとしてうまく機能しているように思う。後は、クランクアップまで走り抜けるのみである。